

## 平成 27 年 9 月定例会 一般質問

荒井宏幸 保守市民クラブの荒井宏幸です。今回初めて一般質問に立たせていただきました。私の質問をもちまして、今回の新人議員全員が一通り質問をすることとなります。図らずも満を持して最後の登場となりました。ふなれですが精いっぱいやりますので、どうぞよろしくお願い致します。（拍手）

さて、日本創成会議が予測した 2040 年までに 896 の自治体が消滅するとしたショッキングな発表は記憶に新しいところです。地方創生に向け、人口ビジョンとまち・ひと・しごと創生総合戦略の策定に各自治体は危機感を持って取り組んでいることと推測します。本市の素案も全員協議会にていただきました。ほかと横並びではない、金太郎あめのような、独自性のある特色を持った内容にブラッシュアップされるよう期待を込め、質問に入りたいと思います。

それでは、通告に基づき、一括で質問させていただきます。まずは、第 1 の質問、本市における交流人口の拡大についてです。

私は、昨年までホテル業界にいましたので、本市における交流人口については非常に関心があります。そして、同時に高い可能性も感じています。現在首都圏を中心に国内で出張の多いサラリーマンからホテルの予約がとれないと悲鳴が上がっていると聞きます。背景にあるのは、外国人旅行者の急増です。外国為替相場の円安基調にビザの発給要件緩和、消費税の免税制度拡充などが効果を上げ、アジアを中心に訪日客がふえています。本日の朝刊で各紙が取り上げていましたが、9月10日時点で年間訪日

客が1,342万4,000人となり、過去最大で最高であった昨年の1,341万人を上回り、年間1,900万人に届く勢いとなっており、2020年までに年間2,000万人とする政府目標の早期実現が現実味を帯びてきたという状況です。

イギリスの調査会社、STRグローバルによると、大都市におけるホテルの稼働率は、ことし1月から6月で東京都が86%、大阪府が90%、京都府が84%と満室に近い状態です。宿泊料金も上昇を続け、東日本大震災のあった2011年に比べ、東京で3割、大阪で4割ほど高くなっています。これに対し、新潟市内のシティホテル、ビジネスホテルが集まる団体に稼働率を問い合わせましたところ、ことし4月から7月で71.8%という回答がありました。これは、過去5年間の中で最も高い数字であるそうです。しかしながら、大都市の常に満室に近い稼働率に比べると、まだまだといった感が否めません。料金については、各ホテルとも情報を開示していないそうなので、具体的な数値は出ていませんが、まだ満室に近い状態ではないので、東京、大阪のような高い上昇はないとのこと。ポイントは稼働率を上げていくことですが、それについてはまだまだ伸びしろがあると思っています。

そこで、(1)の質問、MICEを誘致するための具体的な施策についてです。

にいがた未来ビジョン、新潟市まち・ひと・しごと創生総合戦略素案の中には、MICE誘致活動の推進という文言が出ています。MICEとは、ミーティングのM、インセンティブツアーのI、コンベンションまた

はカンファレンスのC、イベントまたはエキシビションのEの頭文字をとった造語で、日本語にすると会議、研修、報奨・招待旅行、大会、学会、国際会議、展示会となりますが、一般の観光と違い、グローバル企業や学術系の団体の関係者やその家族が世界各地から訪れるため大型団体となる場合が多く、しかも比較的高単価で滞在日数も多く、開催後にはパーティーや周辺観光が多く発生するため、コンベンション施設や展示ホール、ホテルなどの宿泊施設、周辺の観光施設や運輸機関、さらにはイベント関連会社など、広範囲にわたって地域に大きな経済波及効果をもたらすと言われています。

歴史的建造物や風光明媚な景勝といったインパクトのある観光スポットに恵まれているとは言いがたい本市にとりまして、このMICE誘致は有効な手だてであると確信します。さらに、朱鷺メッセという複合型施設があり、観光コンベンション協会による宿泊や古町芸妓など伝統芸能の補助金制度も充実しており、交通の便もよく、近県と比べ新潟には優位性がありました。しかしながら、ここに来て北陸新幹線が開業し、観光地として人気の高い金沢市がさらに注目を浴び、同じ新幹線の駅がある高崎市においても平成29年完成に向けコンベンション施設の建設計画が進んでいます。高崎は、東京から新幹線で1時間という好立地に加え、世界遺産富岡製糸場への周辺観光が可能です。このように本市を取り巻く状況が変わる中、MICE誘致活動の推進をしていく上で具体的な施策が見えてこないのですが、どうお考えでしょうか。

次に、(2)の質問、コンベンション誘致のためにさらに大学と連携を

強固にすべきと思う件ですが、このことについて1つ事例を挙げますと、仙台市は平成24年に東北大学と「コンベンションの誘致・開催における連携・協力に関する協定」を締結し、取り組んでいます。これは、北陸新幹線開業による交流人口減少を危惧し、いち早く動いた結果と聞いています。本市においても、県内13大学で構成される大学連携新潟協議会との連携協定を結んでいます。さらにMICE誘致に特化した連携、協力を深めていくことが必要と思われれます。

また、MICEを戦略的に誘致するため、観光庁は日本政府観光局とともに、産業界や学術分野において国内外に対し発信力やネットワークを有する方々を日本のMICEアンバサダーとして委嘱するMICEアンバサダープログラムを実施しています。新潟においても国内外から認められている先生をぜひMICEアンバサダーに推薦し、誘致、競争力を強化していく取り組みを提案し、市長の所見を伺います。コンベンション誘致のためにさらに大学と連携を強固にすべきと思いますが、いかがでしょうか。

次に、(3)として、現在開催中の水と土の芸術祭ですが、交流人口拡大についてどれほど寄与しているのか伺いたいと思います。

私も水と土の芸術祭の会場をいろいろ回って見てきました。作品についての感想は人それぞれ感じ方が違うと思うので、この場では控えたいと思いますが、改めて気づかされたのが新潟にはこんなにもロケーションのすばらしいところがたくさんあったのかということでした。

さて、水と土の芸術祭は、芸術による地域活性化や新潟の魅力発見及び発信など、市民参加によるさまざまな観点から楽しめるイベントであり、

ことは東アジア文化都市のメイン事業にも位置づけられ、多くの重要な役割を担っていると思います。そして、その中でも経済効果を上げていくことは決して外せない重要な役割であると思っています。

そこで、アの質問ですが、この事業が本市に与える経済効果は、金額にしてどれくらいを見込んでいるのか。期間中の来場者数とガイドブックの販売冊数について設定している目標はどれくらいで、現在の達成状況はどうなのかお尋ねします。

先日私は、十日町市と津南町で開かれていた大地の芸術祭にも行ってきました。来客数が開催ごとに増加しているというだけあり、点在する展示会場の多くは駐車場が込み合い、県外ナンバーの車も目立ちました。さらには、周遊バスが到着すると大勢の人がどっとおりてきていました。先月の日本経済新聞の記事にて、関口芳文十日町市長は、大変な波及効果が出ていると言っています。また、ピーク時に訪れる観光客数に比べ、旅館の数が少ないとも言っており、交流人口の拡大が感じ取れます。本市の場合、多種多様な目的で訪れる人が多いのでわかりにくいのかもかもしれませんが、残念ながら私の前職のホテルでは水と土の芸術祭を目的に訪れたという宿泊客をこれまでスタッフはお見受けしたことがないという話も聞きます。

そこで、イの質問ですが、水と土の芸術祭は外からの来訪者よりもまずは市民向けのイベントと感じられますが、どうでしょうか。今週の市報にいがたにも「市民が主役の芸術祭 アートな秋を楽しもう！」と見出しが出ていました。この事業は、その市民からも望まれ、受け入れられてはい

ないようにも時として感じられることもありますが、費用対効果はどう見ているかお聞かせください。

次に、第2の質問、中心市街地の活性化についてお伺いします。

古町の話から入りますが、平成22年の営業終了からなかなか再生の話が進まなかった旧大和跡地を地元企業の明和工業が取得し、再開発に乗り出したことは実に喜ばしいことであると思っています。私は、以前万代シティの中心で働いていました。かつてのダイエー新潟店閉店からラブラ万代開店までの耐震改修工事の間、そしてシルバーボウルビル解体からラブラ2開店までの建設工事の期間を毎日間近で見っていました。町の一角を担っていた存在感のある大きなビルの明かりが消えることは、言いようのない寂しさがあります。そして、それは活気だけでなく売り上げも落ちていくというダメージを受けます。古町の皆さんにおかれては、もう5年間もそのような状況下でたゆまぬ営業努力を続けておられます。しかしながら、長い工事が終わり、待望のオープンを迎え華々しく開店した際には、町が活気づき、人々が集まり、売り上げが伸びていくという体験もありました。旧大和跡地の新しいビルの完成は早くて平成31年とのことですが、ぜひおくれることなく竣工し、そして中に入るテナントも魅力ある店舗が多くそろそろ願ってやみません。

そんな中、地権者からの希望で、この建物には市役所の一部機能が移転する可能性があるとの報道もありました。願わくば、行政機能は外からサポートする形をとり、中には特色あるテナントが集う商業施設を誕生させてほしいと思います。そして、その経済の連携性から相乗効果、好循環を

生み出して、さらには町全体に人々を呼び込む求心力となることを期待します。新しいビルの開業にはそのような起死回生の力があると思っています。現在も周辺のNEXT21や西堀6番館ビルなどには行政機能が入っています。古町は、昔ショッピング街、今飲み屋街、次は官庁街にするつもりかと言う人もおられます。

そこで（１）の質問です。旧大和跡地再開発の進捗状況についてお聞かせください。

続いて、（２）の質問ですが、先日９月５日にＢＲＴの運行が始まりました。平成34年ころには新潟駅の立体交差事業も完成し、バスが駅の下を通り、市民病院やビッグスワン、エコスタジアム方面を回る環状線ができ上がることと思われまます。そうした動きに向け、利便性がますます高まる新潟駅前、商業施設が充実し、若者から年配者まで集客力のある万代、歴史と文化のある古町、これらをこれからどう結びつけて、人口減少が進む中どうやって活性化させていくのか、今から考え、動いていかなければいけないと感じます。新潟駅前、万代、古町の今後の位置づけをどうお考えになるか、お聞かせください。

次に、最後の質問となります。ＪＲ越後石山駅橋上化の早期実現についてです。

新潟駅から信越本線で長岡方面に向かい１駅目に越後石山駅があります。周辺には住宅街が広がり、多くの市民が通勤、通学に利用しており、１日約4,000人の乗降者数があります。ことし３月末には駅前西口広場が完成し、ロータリーもできました。さらに、公共交通が乗り入れられるア

クセス道路の整備計画も前に進んでいます。しかしながら、周辺の整備が進み、利用者の増加も見込まれる一方で、駅舎本体の整備は遅々として進展が見られません。現在越後石山駅は上り線のホームと下り線のホームにそれぞれ改札口がありますが、一旦改札を入ると反対側のホームへ行くことができません。トイレも上り車線側にしかありません。待合室もそれぞれ七、八人入るのが精一杯といった広さです。冬場は運休などもあり、凍えながら電車を待つことになります。広い待合室の設置が求められています。駅舎の隣には古い地下道があり、ホームの反対側へはそこを歩いていかなければなりません。ところが、この地下道はまるでドラマの犯罪シーンなどに出てくるような暗く湿った感じがあり、できれば通りたくないという声も少なくありません。

そこで、ぜひとも利用者の多い駅の利便性、安全性の向上のために橋上化の一日も早い実現を望むところです。さらに、高齢者、障がい者にも利用しやすいエレベーターやエスカレーターの設置もあわせて望むところです。今後の見通しについてお聞かせください。

以上で質問を終わります。

○議長（高橋三義） 篠田市長。

〔篠田 昭市長 登壇〕

◎市長（篠田昭） 荒井宏幸議員の御質問にお答えします。

私からは、中心市街地の活性化のうち、まず旧大和跡地再開発の進捗についてです。

旧大和跡地は、榎谷小路と古町通に面し、西堀ローサやNEXT21、三

越百貨店といった周辺の民間施設とともに古町地区の中心に位置しており、単なるビルの建てかえではなく、市街地再開発事業の効果を古町全体に最大限に活用する取り組みが必要と考えています。現在本市においては、年内の都市計画決定に向け手続を進めている一方、地権者で構成されている準備組合において来年度の事業着手に向け、主な用途を商業・業務施設として事業計画の策定に取り組んでおり、平成31年度ごろの完成を予定していると聞いています。町なかへの行政機能の一部移転については、旧大和跡地は有力な候補地として考えており、準備組合が作成する具体的な施設計画を見た上で、市民の利便性を踏まえ、検討を進めていきます。

次に、新潟駅前、万代、古町の今後の位置づけについてです。

本市の中心市街地は、その歴史的背景から3つの地区に区分され、陸の玄関口である新潟駅を中心に大手事業所の本店や支店などが集積する新潟駅前地区、昭和に入ってから大規模な開発が進められ、バスセンターを中心として百貨店や大規模集客施設が集積する万代地区、新潟湊が繁栄をきわめていた時代から商業、業務の集積地として本市の顔となっている古町地区があります。本市では、都市活動の拠点として、これら3地区を包含した区域を都心として位置づけています。都心は、他都市から訪れる人々に対する本市の魅力の中心であり、また市内だけでなく近隣市町村からも若者から高齢者まで多くの人が集まり、就業やショッピング、娯楽など多様な活動が営まれる場となっています。そのため、都心では、誰もが快適に移動できる交通環境として、自動車の利便性よりも歩行者、自転車やBRTなど公共交通による移動の利便性を優先し、その向上に取り組むとと

もに、既存の都市基盤や3地区それぞれの個性、特色を生かしながら、一体の都心として魅力のある空間整備、高次都市機能の集積など、総合的な施策を講じていきます。

○議長（高橋三義） 斎藤観光・国際交流部長。

〔斎藤博子観光・国際交流部長 登壇〕

◎観光・国際交流部長（斎藤博子） 本市における交流人口拡大についてお答えします。

初めに、M I C Eを誘致するための具体的な施策についてです。

本市は、これまでも朱鷺メッセなど恵まれたコンベンション施設を初め、高い拠点性、さらには国内でもトップクラスの支援制度をセールスポイントに、新潟県や新潟観光コンベンション協会と連携し、国内外で開催される商談会への参加やM I C E関係者の招聘など、積極的な誘致活動に取り組んできました。平成25年度には、文化・スポーツコミッションを設立し、文化・スポーツイベントの誘致活動にも積極的に取り組みを進め、M I C E開催件数は平成21年度の204件から昨年度、平成26年度は218件に増加し、延べ宿泊者数も約189万人から約215万人へと増加しています。これらは、日ごろの誘致活動や各種施策の実施による成果のあらわれと考えています。来年度には、約4,000人の参加者が見込まれる平成28年度全国中学校体育大会夏季大会や全国の鑑賞菊の愛好家が集う全日本菊花連盟全国大会新潟大会の開催などを予定しており、M I C E開催は宿泊者数の増加という交流人口の拡大に重要な役割を果たすものと考えています。

一方で、議員御指摘のように高崎市で計画されている大規模な国際会議が開催可能なコンベンション施設の整備や北陸新幹線の開業などにより都市間競争が激しくなっており、本市のMICE誘致環境は厳しい状況にあります。今後は、これまで構築された関係者との関係を強固にするとともに、国内外のキーパーソンの招聘やMICE補助の拡充など開催支援の充実を図るほか、御提案の日本政府観光局によるアンバサダー制度を初めとする各種支援制度も活用しながら、新潟県やMICE関係者との連携を図り、引き続き誘致に取り組んでいきます。

次に、大学との連携強化についてです。

大学などの研究機関による学会は、県内外からの多くの参加者が見込め、アフターコンベンションなど本市における経済効果が期待できることから、市内の大学を中心にキーパーソンである研究者を定期的に訪問し、学会誘致を積極的に働きかけています。また、新潟県とも連携しながら、首都圏及び大阪、京都などの関西圏に加え、東北地方の大学や研究者を訪問し、学会などの誘致拡大を図っています。これらの成果として、今年度は新潟大学と連携して誘致し、約6,000人の参加があった日本神経学会学術大会を初め、参加者1,000人以上の学会など、既に開催済みのものも含めて14件となっています。

また、来年度開催のものでは、新潟大学が大会事務局を担う5,000人規模の歯学系の学会や首都圏のキーパーソンを通じて誘致した6,000人規模の応用物理学系の学術講演会が予定されているほか、約60件の学会などについて交渉を行っています。今後もさらに大学や研究者との連携を密にし

てMICE誘致を実現し、本市の交流人口の拡大につなげていきます。

次に、水と土の芸術祭による交流人口の拡大についてのうち、経済波及効果、来場者数などの設定目標と達成状況についてです。

過去2回の開催において、1回目の来場者数は約55万人で、経済波及効果は約12億5,000万円、2回目の来場者数は約72万人で、経済波及効果は約19億5,000万円でした。今回の開催は、過去2回と比べ会期が約半分となりましたが、目標来場者数を55万人に設定し、経済波及効果は約15億円、ガイドブックの販売数は5,700冊を見込んでいます。開幕から8月末までの来場者数は、集計済みのもので約43万人となっています。この来場者数には、本芸術祭の柱の一つであり、前回同様大変多くの方から参加または観覧いただいている市民プロジェクトが実績報告をまだいただけないことから計上できていないなど、一部含まれないものがあります。

また、ガイドブックの販売数については、書店販売分を除き、実行委員会で把握している8月末までの実績で約4,700冊となっています。

次に、芸術祭の実施目的と費用対効果についてです。

水と土の芸術祭は、市民主体、地域主導の芸術祭です。地域の歴史や暮らし文化、伝統芸能などの魅力を市民と協働で掘り起こし、磨き上げ、現代アートの力を活用して広く発信し、交流人口の拡大にも寄与することを目的に実施しています。芸術祭の来場者のうち市外からのお客様が占める割合は、1回目は27.6%、2回目は46.8%となっています。今回は8月末時点で44.2%ですが、東アジア文化都市のメイン事業となっていることから、中国や韓国を中心に海外からも多くの視察やツアー客の方が来られて

います。芸術祭の過去2回の評価としては、来場者数や経済波及効果の面のみならず、地域の活性化や新たな市民力の発展により、本市の文化創造都市の前進に大きく寄与していることも大切な成果として挙げられます。

また、地域の歴史や地勢的特徴を広く市民の皆さんから知っていただくことは、シビックプライド、これは自分の住んでいるあるいは働いている町に対して抱く誇りや愛着というものですが、このシビックプライドや防災意識の醸成にもつながっていくと考えています。

加えて、外部からの評価としては、1回目では地域活性化センターの第14回ふるさとイベント大賞選考委員特別賞を受賞したほか、通称バンブーハウスの作家である王文志さんや西蒲区が実施しているわらアートが瀬戸内国際芸術祭に招聘されていますし、市民プロジェクトで実施しました鯛車復活プロジェクトは第4回ティファニー財団賞伝統文化振興賞を受賞しています。2回目の芸術祭では、全国紙において著名な美術専門家が選ぶ展覧会ベストフォーのトップに本芸術祭の作品が選ばれるなど、全国的な評価を受ける芸術祭に発展しています。平成24年度には、芸術祭を初めとした本市の多彩な文化活動が評価され、文化芸術創造都市部門で文化庁長官表彰を受賞しました。ことしは東アジア文化都市の日本開催都市に選ばれるとともに、日本で初めての開催となるASEAN10カ国に加えて日中韓3カ国の文化担当者が参加するASEAN+3文化協力ネットワーク会合の開催都市にも選ばれ、先ごろその会合が行われました。これらのことは、これまでの芸術祭の取り組みの大きな成果であると考えています。

さらに、世界最大級の美術館の一つであるメトロポリタン美術館の日本

美術キュレーターなど、東アジア文化都市の各事業に参加された各国を代表する方々や国内では先日御視察いただいた文化庁長官を初め、各自治体の首長など自治体関係者の皆さんからも数多くごらんいただいております。国内外に本芸術祭をPRし、本市の魅力を発信することができています。このように費用対効果という観点だけではあらかた有形的、無形の成果も多く出ていますことから、今後もこの芸術祭を大切に育てていくことが本市にとって重要なことではないかと考えています。

○議長（高橋三義） 大沢土木部長。

〔大沢藤雄土木部長 登壇〕

◎土木部長（大沢藤雄） JR越後石山駅橋上化の早期実現についてお答えします。

本市が目指すずっと安心して暮らせるまちの実現に向け、地域の拠点となる駅周辺の整備や公共交通機関との連携強化は重要な取り組みと捉えています。越後石山駅は、1日の乗降客数が約4,000人と通勤、通学を初め多くの市民の皆様から利用されており、議員お話しのとおり、利用者の利便性と安全性の向上を図るため、この3月に駐輪場の拡充や自家用車などの乗降スペースを配置した西口駅前広場の供用を開始し、現在はバス乗り入れも可能なアクセス道路の整備を進めています。

そして、バリアフリー化を考慮した駅の橋上化については、国の要綱に基づき都市計画決定や東口駅前広場の整備などの調査を進めており、今後関係機関との協議を行うとともに、地元住民の皆様と御意見をお聞きしな

がら事業化に向けて取り組んでいきます。

〔荒井宏幸議員 発言の許可を求む〕

○議長（高橋三義） 荒井宏幸議員。

〔荒井宏幸議員 登壇〕

◆荒井宏幸 終わります。（拍手）